

十章 ミラノ最後の秋（その一）

2002年8月末、2カ月の日本滞在を終えてイタリアに戻ると、いつものようにミラノはすでに陽射しが弱い。

4月、5月は日光がきらめき、町全体が輝いて見えるほど明るいのに、高緯度とあって秋はどうしようもなく暗い。来た年の落ちこみほどではないけれど、鬱（うつ）になりがちな季節である。

しかし、年末には日本に本帰国することを思えば、惜しむ気持ちを胸にかかえ、去りゆく前になすべきこと、したいことをしておかねばならない。

ひとつはヴェローナという街に、夏の3カ月間だけ行われる野外オペラを家族で見に行くことだった。劇場は今ではアリーナと呼ばれているが、もともとは古代ローマのコロッセオという円形競技場（兼劇場）である。大の建築好きだったローマ人はローマ帝国が栄華を誇ったころ、その広大な版図のあちこちに3階建ての水道橋や、ばかどかい教会、円形競技場、劇場などをつくり、2千年を経て今もなおいくらかを残している。日本の古代建築が木造で、腐ったり焼けたりしてなくなってしまうのに比べ、石や煉瓦ははるかに残りやすい。

このアリーナに実際何人入るのかは、イタリアでは資料を集めるのが難しいのでよくわからないが、1万人は超すのではなかろうか。ローマのコロッセオよりは小さいと思うが、それでも、大きい。外から見ると、ぐるりと城壁がそそり立っているような造りで、雨風に耐え補修を重ねた煉瓦壁が美しい。

ヴェネチアとミラノのちょうど中間辺りにあるヴェローナという町自体も、こぢんまりと美しく、イタリアにはベルガモやルッカなど、中世の姿を残した美しい町があちらにもこちらにもある。ローマやフィレンツェのような大都市も豪華でいいが、大きいだけに、あまりきれいではない区画もある。町としてはもう少し小さめのほうが、まとまった美しさがあると思う。日本人観光客にもぜひおススメである。

比べると、日本にはどうしてこんな古くてたたずまいのある町が残っていない

いのだろうかと思う。山口に長く住むイギリス人が嘆いていた。「京都にはがっかりした。あれを古都と誇るのはおかしい」

「なんで？ 京都の古い立派なお寺は建物も庭もすばらしくて、イタリアの大聖堂並みでしょ？ それにあちこちに『研（と）ぎ屋』とか『染物』とかの古い看板が出てて、ほかの町にはもうないような専門店が昔どおりの店構えで残っているのを見ると、ああ、さすが古い都だなんて感じさせられるわよ」

「そりゃ古い寺や店は残ってるけど、それが全部ぽつんぽつんと散らばってるだろ。すぐ隣には現代的なコンクリートのビルやファストフードの店がばかでかい看板出して並んで、せっかくの情緒がぶち壊したよ。だけど、ヨーロッパの古い町は、ある区画全部が歴史的たたずまいを残している」

「……確かにそうだわ。イタリアでも古い町並みのところは通りが全部石畳で、その地区に近代的ビルはない。新しい店があっても、古い建物の中におとなしくおさまってる。ド派手な看板はなかった」

「だろ」

うーん、たぶん日本人は「かけがえのない歴史」や「町の美しさ」という価値より、「便利さ」という価値のほうを選んでしまったのだろう。それに明治維新以降、欧米の真似をすればいいと信じて、新しいものほどいい、古いものはそれだけでダメ、みたいな風潮があった。今さら日本古来の美しさを再発見しても、一度壊したものをとり戻すのは簡単ではない。

ついでに言うと、日本人の新しいもの好きの根底のひとつには、食文化、なかでも刺身を食べる習慣があるんじゃないかとわたしは思う。鯛（たい）や平目（ひらめ）はねかせたほうがうまいとも聞くが、魚は基本、新しいものが圧倒的にうまい。これはもう、瀬戸内海沿岸に住むと実によくわかる。刺身用なら市場で生きている魚しか仕入れない、と断言する地元の小さな魚屋さんから鰯（ぶり）の切り身を買くと、まな板にのせても反っている。死後硬直がまだとけていないのだ。食べるそこりこりとした歯ごたえがするうえに、うま味が強烈である。

脂ののった背黒鰯（せぐろいわし）を梅煮にしても、夏の鱈（きす）を塩焼

きにしても、ことばで説明するのは難しいが、鰯なら鰯、鱈なら鱈の味がしつかりと味わえ、とにかくうまい。この魚屋さんが魚を選ぶ目が確かなのがあるが、新しいからだ。茨城であんなうまい魚を食べたことはない。最近では都会でも新鮮な魚が手に入るとはいうものの、地元で買うのと比べると最低1日は時間が経っている。比べものにならない。

しかし肉は、熟成させたほうがうまいと聞く。新しい必要はない。ヨーロッパの食生活に欠かせないチーズもワインも、上手にねかせると新しい製品にはないうま味が出る。日本はヨーロッパに比べるとはるかに高温多湿だから、食品が腐ったりカビたりしやすく、上手にねかせるのが難しいこともあるかもしれない。

さて、イタリアはオペラの盛んな土地である。ミラノのスカラ座は、オペラ劇場として世界でも第一級で、たとえオペラファンでなくても、昼間の見学だけでいいから一度は見に行ってみよう、という代物である。平土間の一等席の周りを、5階建ての二等、三等席がぐるりと馬蹄形に囲んでいる。天井や壁が、金ぴかの装飾と、フレスコという白漆喰（しろしっくい）に描かれた絵に埋めつくされているが、品は悪くなく、まさに豪華絢爛。歌劇はわからなくても、その雰囲気だけで酔ったようになるほど、いい。欠点は、2階席以上はそれぞれが10人ずつくらい入れる個室になっているのだが、壁で区切られているため、手すりのすぐそばの席でなければんで舞台が見えず、中腰でのぞきこまなければいけないことである。腰が痛くなった。

一方ヴェローナのアレーナは野外だから個室だの壁だのはなく、全部がはるかかなたの舞台を向いている。まわりの階段席でさえ1人1万円くらいするが、これまた、イタリアに住んだなら一度は絶対行ってみるべし、という場所である。最初は近所の音楽店で勧められて2年前、わけもわからず「ナブッコ」を見た。イタリアが生んだオペラの大家、ジュゼッペ・ヴェルディの作品で、日本では聞いたこともなかったが、どうも旧約聖書の出エジプト記を題材にしているらしい。その日はミラノの家を出るのが遅れて、夜の9時から始まる第一

幕はすつとぼしてしまい、しかも何にも予備知識なしで、せりふも筋立てもさっぱりわからなかったが、それでも、すばらしくよかった。

多いときは2百人が舞台に出て、兵士や宮廷の侍女らしい派手な衣装と化粧で、槍やスカートの端をひるがえして踊り、唄う。その迫力。

独唱には凄（すご）みがあふれ、合唱はひたすらハーモニーが美しい。最後の最後まで鮮明なまま、和音が小さくちいさくなって合唱が終わったときの感動は忘れられない。わたしは独唱や重唱はともかく、合唱があんなにきれいだと思ったことは今までなかった。アンコールがかかり、合唱のアンコールが劇中でおこなわれたのも驚きだった。が、それも道理で、その合唱「ヴァ、ペンシエロ」は、百年と少し前にこのオペラ「ナブッコ」が発表されたときに熱烈な人気で迎えられ、以来、第二の国歌としてイタリア国民に愛され続けている、という名曲なのだった。

当時イタリアには多くの都市国家があるだけで、イタリアという「国」はなかった。統一運動が起こり、外国からの干渉があり、戦争があり、という、日本の明治維新を思わせる動乱のさなか、キリスト教徒が迫害を受けエジプトを脱出する筋立てに、イタリア人は自分たちの姿を重ね合わせた、という歴史的背景もあるらしい。

すぐれた芸術は、どんな素人をも、また頭で理解しているとかいないとかに関係なく、ひとの心を感動させるものなのだ。それを知らないのは、ほんとうにすぐれた芸術作品にふれたことがないひとではないか。

今年は日程から「トスカ」を選んだが、残念なことに感動はなかった。「ナブッコが壮大な歴史劇なのに比べて、トスカは愛憎物の室内劇で登場人物が少ないから、野外劇場には向いていなかったね」とは夫の弁である。夜中の12時過ぎてオペラが終わったあと、眠りこけていた子どもたちを立たせて宿に向かい、ゆっくり眠った。翌日、シェークスピアの劇のロミオとジュリエットの舞台というヴェローナの町を歩いてまわったのは楽しかった。

次の「課題」はオーボエだった。イタリアで酔狂にも生まれて初めて手にとっ

た楽器を、2年ほど習ったあと、帰国のつもりで中断したままである。実際は帰国ではなくがんの治療にかかったわけだが、先生のリッカルドはもうわたしが日本にいると思っているのだろう。

わたしより4つ年下で、わたしの倍くらいの体重の持ち主だったリッカルドは、ミラノの名門音楽院ジュゼッペ・ヴェルディ・コンセルバトリーオの出身だが、カトリック大学で吹いていたあと、ヨーロッパのあちこちでも吹いたことがある、と伯母にあたる音楽学院の事務のひとが言っていたと思う。スカラ座でも、師匠の代わりに吹いたことがあると本人は言っていた。が、結婚にあたり、音楽では食えないので会社勤めを始めた、という話で、つまり、第一級のオーボエ吹きではなかったということだ。

しかし、音が美しいとはこういうことか、というほどの音を出した。クラシック音楽の本場イタリアでは、演奏家の層が厚いのだろう。

音が甘い。艶（つや）がある。

しかも哀愁を秘めており、わたしは、自分がなかなか思うように吹けなくても、この先生の音を毎週聴（き）けるだけでいい、この音に少しでも近づきたい、と思っていたものだ。

「いいか、いいオーボエ吹きっていうのは、いい音が出せるやつだ。指がちゃんと動くとか、リズムがあつてるとか、そんなのはこの次だ。どんなに正確でも、いい音の出せないやつはいいオーボエ吹きじゃない」

その音がすぐに出せれば苦労はしない。

だいたい、ピアノに小学校のリコーダーくらいしか身近にない、ほとんどの日本人が知らない（少なくともわたしはてんで知らなかった）事実、ピアノ以外の多くの楽器は音程をきちんと合わせるのがえらく難しいことと、同じ楽器でも違うひとが吹くと、まるで音が違うことである。あまり音色の変わらないピアノでさえ、イタリアで娘のレッスンについて行って先生が弾き始めたたん、あまりの音の違いにぶん殴られたような思いをした経験があるが、オーボエなどその比ではない。

まるで、音が違う。ただの1音、ドならドを吹いても、うまいひとのオーボ

エのドは、しみじみと聞きほれる豊かな音である。それだけでも芸術というにふさわしい。しかしわたしのオーボエのドは、ただの音、ただのドに過ぎない。

オーボエは名前が知られてない割には、テレビドラマのい〜いところでバックでソロで流れる、ヴァイオリン級の旋律楽器である。しかも、先生いわく「ヴァイオリンなんてオーケストラに 20 人からいるだろ、オーボエは何人だ？ 1 人か 2 人だ。よっぽど目立てる主役だよ。ま、オーケストラで管楽器やってるやつなんて、みんな俺が主役だと思ってる気はあるけどな」。つまり、劇場の隅々までとおる、いい音が出る、はずの楽器なのである。

オーボエよりもクラリネットのほうが「クラリネットを壊しちゃった」の曲のおかげで名前だけは有名だが、わたしに言わせると、「オーボエによく似ていて、オーボエよりパツとしない、ぼけたような柔い音色がする」楽器である。もっとも、クラリネットのほうがはるかに吹きこなすのが簡単らしい。

わけは、オーボエの口にあたる部分の 2 枚重ねのリードにある。これをうまく震わせてきれいな音を出すのが難しい。クラリネットはリードが 1 枚。リードというのは河原にはえる葦（あし）の茎で、オーボエの祖先はギリシャ時代にまでさかのぼるらしい。

わたしはイタリアにいるあいだに、この楽器の美しい音の出し方だけでも、ものにしたかった。日本では、「うーん、ピアノとヴァイオリンは日本人でも世界的な奏者がいるが、管楽器はねえ……」と先生が言うので、たとえ帰国してから続けるにしても、リッカルドほどの先生が見つかる見込みは薄かった。

中古ながら 15 万円ほど出して、清水の舞台から飛び降りる覚悟で買った楽器がある。プロフェッショナル、と刻まれたプロの演奏会用で、日本で新品を買ったら百万はするだろう、との代物である。先生の「ふん、いい楽器だ。俺のオーボエより高音がきれいに出る」とのお墨つきなのだが、哀しいかな、まだわたしにはその高音がきれいに出せないどころか、音程がとれない。楽器がもったいないのである。

1 年ぶりに先生に連絡をとり、自宅を訪ねて行って奥さんも交え病気の話をし、もう一度教えてくれと頼んだ。音楽学院のほうでも、この 1 年の間に、こ

こらでは知られたパイプオルガン弾きで、ローの町の大きな教会の聖歌隊の指揮も振る、リッカルドの伯父のトイヤ院長が卒中で倒れたとのことで、奥さんはたいへんな苦勞をしたらしい。

11月には再建手術が控えている。わたしに残された期間はわずか3カ月。

3番目の楽しみは詩だった。アメリカでもイタリアでも、詩を書き、発表するひとは結構多い。しかし日本では小中学校で詩を書かせるわりには、おとなの世界に普及していない。どうしてだろう、と考えてみると、俳句、短歌といった伝統的な形式の詩が、現代詩の世界を食っている感じである。あとは歌謡曲やポップ、シンガーソングライターなどの分野だろう。中島みゆきなんて今や中学校の教科書にも載（の）っている。

前にもふれたが、8年前に英語で書いていた詩を、イタリア語学校の先生レナータ夫妻の助けを借りてこの春イタリア語に書き直し、推敲（すいこう）して3つ選び、少し北の小さな町の、イタリア標準語部門の詩のコンクールに送っている。ダメで元々ではあるが、その一方で入賞の可能性は大（おお）いにある、と2人とも強気で信じていた。

ついに10月、電話がかかった。

「もしもし、こちらはレニャーノの詩のコンクールの係ですが、マドカさんですか」

「はいっ！」 声が思わず鋭くなる。

「あなたの詩が最終20人の選考に残り、薔薇賞となりました。」

やった……

「ところであなたの名前は外国人のようですが」

「はい、日本人です」

「イタリアにはどのくらいお住まいですか」

「4年です」

「そんなわずかのあいだにこんな詩を書かれるなんて。素晴らしい」

実際彼は表彰式のときに、わたしの名を読み上げたあとで特別にコメントを

つけてくれ、わたしは非常に嬉しかった。残念だったのは最優秀作品などを印刷した小冊子には、薔薇賞受賞者の名がなかったことと、レナータ同様、「最優秀ではなかった！」ことだった。レナータなぞ、電話したとたん、一等だった？と聞いたくらいである。

四十雀（しじゅうから）

恋を失い命が尽きて
女は
小さな鳥にその身を変えた

一羽の四十雀に

そしてあなたの窓にやってきて
色の淡いあなたの瞳を
小首を傾げのぞきこむ
——それは彼女の癖だった

もしもジ　ジ　チュイルリ　ジ　との囀（さえず）りに
あなたが耳を傾けるなら
それは一度もあなたを貫かなかった
彼女の恋の唄（セレナーデ）

もしもきゃしゃな灰色の翼を
あなたが丸い親指で二度撫ぜるなら
それは彼女を爪先立ちで回らせ続けた
火のように熱い夢

羽毛（はね）の頬に流れる冷たい涙を
もしもあなたが見守るなら
それは彼女の鼓動を最後に止めた
暗い色の石

時を超え
何千キロを越え
小鳥はあなたのもとへ飛ぶだろう
ただ一度

枝垂れ桜

この想いを断ち切ろう
と彼が決心した日
一本の桜の樹が
満開だった

樹を見あげ
かすかに揺れている
何千もの薄桃色の花びらの下に
むくわれなかった恋を埋めていいかと尋ねると
桜の樹は
一番長い指で彼の左の頬をそっと撫ぜ
いいよと言った

むきだしの指と爪で穴を掘り
傷んだ心臓を
瘦せた肋骨のあいだから
音きしませてひきずりだした
穴の底にそっと置く
黒い土がくぼみを埋めた

どこか遠くで
何も知らない想われ人が
ふと微笑み
歩き去っていく

春の雨が始まった
新しい墓を
寛大な樹を
うつろな胸の男を
静かにぬらす

水仙

櫛の木が七度芽ぶいて葉を落とした後でさえ
あなたが振りはらう虫ほどの重みすら
わたしにはない

一つ空の下にしながら
違う色の太陽がわたしたちを照らす

同じ土の上で

異なる名前の空気をわたしたちは吸っている

水仙が黄色い頭をゆらすとき

あなたが踏みにじる草の葉一枚ほどの厚みも

わたしにはない

ほととぎすが高らかに鳴き誇るとき

わたしの声は

風に揺れる梢のざわめきよりも

あなたの耳には届かない

あなたが振りはらう小虫ほどの重みも

わたしにはない

珍しく翻訳の仕事が入ってきた。イタリアに来て 20 年になる日本人デザイナーが、不況で仕事が少ないから、あらためて自分を売りこむためのパンフレットを作るにあたり、原文の日本語を英語にしてくれないかと言う。今まで翻訳の仕事のほとんどは英語から日本語だったが、アメリカの短大に 1 年いたときにレポートはずいぶん書いたし、イタリアで国際クラブの月報にほぼ毎月何か英語で書いていたから、そろそろ日本語から英語への翻訳をしてみたいと思っていたところだった。日本語のニュアンスを隅々まで理解する能力と、それを今度は読む側から見て、そこそこ英語らしい表現に変える自信はわたしなりにある。

なるべく安くと言うことで結局はタダ働きだったが、洋服から家具、台所小物までデザインする世界は知らないことも多く、おもしろかった。それにこの

デザイナーは、わたしのこの『ミラノで乳がん切りました』の最初の原稿をおもしろいと認めて、北イタリア日本人会報に1年以上連載してくれた、恩人でもある。私とはママ友である彼の奥さんが以前イタリアの病院事情を詳しく教えてくれたお返しとして、しばらくしてからわたしが治療経過をまとめて奥さんへ書き送ったのが発端だが、彼が連載してくれなかったら、わたしはどうして自分の書くものに自信を持てなかったろう。

国際クラブにも、半年の限定ながら役員として復帰した。化学療法のあいだ、晩ご飯を持ってきてくれた20人に感謝するためにも、何か恩返しがあった。それにイタリアでのわたしの生活はクラブなしには考えられない。

年度初めの役員挨拶で、わたしは生まれて初めて英語でだじゃれを言った。

「去年わたしは役員会（ボード、board）にいなかったの、退屈しました（ボアド、bored）。だから今年はまた役員をやります」クスクスと笑いが洩（も）れ、あ、通じたんだ、と嬉しかった。

日本に帰る前に、新しく来たひとのための便利帳のようなものを、どうしても国際クラブで英語でつくっておきたかった。たとえば「健康保険証を手に入れるためには、どんな書類を用意してどこの役所に何時から何時までのあいだに行けばいいか」とか、「もし夜怪我をしたり子どもが高熱を出したりしたら、どこの病院に行ったら何とイタリア語で言えばいいか」から、薬局、靴の修理、ピアノレンタル、水道修理、鍵のコピー、スポーツ教室の場所まで、つまりわたしがアレーゼに引っ越してきてわからず困ったことすべての解決法と注意点を、書き残しておきたかったのである。

引っ越したことの無いひとにはわからないだろうが、この手の情報は新しい土地、ましてや外国では、ないとおそろしく不自由なものである。わからないことだらけで、わたしはどれだけ途方にくれ、落ちこみ、だまされ、怒り狂い、二度足をふんだことか。

おまけにイタリアは開いている時間が役所により違う。町役場が午前中しか開いていないなんて日本人には想像もつかない。道路わきの駐車場の仕組みも、

道路に引かれた線の色で無料か有料か分かれていることや、支払い方法についても教わらなければわからない。車検があると知らないからやらないでいて、高速道路で罰金どころか警察に車を没収されたロシア人もいる。

書き出したらあれもこれもと項目が増え、おまけに電話したり行ったりして細かなことを確認しなければきちんと書けない。結局ひと月たっぷりかかり、20 ページの大作になった。抗がん剤治療の副作用で、まだ何となくだるい日もあったが、今しかない、という事実が、わたしにエネルギーをくれたのだろう。

ところが、役員会にかけ、新しく来たひとのための集まりで配ったところ、どうも反応がぱっとしない。がっくりきた。あの努力は何だったのか。

わたしはボロを着て侮辱された経験が痛く、それを防ぐには、などという項目や、同国人がたくさんいる場合には必要ない情報も多かったためかもしれないが、一部の、たとえばチリから来ていたユージーニアや、イギリス人のアナスタジアなどは喜んで使ってくれた。

意外だったのは、一番利用頻度が高かったのは「子守名簿」だったことである。月報の編集者のドイツ人は、この「子守名簿」だけを毎月掲載した。

日本人には馴染みが薄いのが、欧米では母親が外出しているあいだの子守を、近所の信頼できる中学生や高校生に時給 500 円程度で頼んだりしている。それを聞いて初めはとても驚いた。しかし、たとえば両親がおよばれで食事に出るときに、6 歳の子をひとりで夜 11 時過ぎまで置いておくのは物騒だし寂しがる。が、自分のことは充分自分でできるから、いてくれるだけなら子守は 13 歳でもかまわない、と言うのだ。落ち着いて考えてみれば、確かにそうかもしれない。

国によっては、小さな子どもひとりだけで家に留守番させるのは親の怠慢・虐待であるとして、法律で禁止されているという事情もある。もちろん、赤ん坊がいるからせめて子守の年齢（とし）は 18 歳くらい、というひとはいるが、母親の経験があるひとのほうがいい、とはあまり聞いたことがない。そんなことを言うのは、自分が子守をやったことのない日本人くらいのものであろう。

こちらでは他人を家に入れることも平気である。その理由として、子守には、

子どもが過ごす居間や子ども部屋だけ開放しておいて、親の寝室など他の部屋には鍵がかけられる、という家の造りがある。わたしたちのイタリアの家では、3つの寝室だけでなく、居間、台所、トイレ、風呂、ボイラー室、車庫のすべてに、中と外の両方からかけられる鍵と鍵穴がついていた。それを最初に見たとき、わたしは唐突ながら「前方後円墳」を思い出していた。

仁徳天皇陵（と伝えられている）古墳の形である。昔英語で日本史のさわりを勉強したとき、前方後円墳のことを、フロント・スクエア・バック・サークルなどと訳すのだろうか、といぶかっていたら、英語ではいとも簡単に「キーホール（鍵穴）型古墳」と呼んでいて、あまりの発想の違いに、わたしはしばらくポカンとしていた思い出がある。ホームズやポワロなどの推理小説にもよく鍵は出てきたが、鍵と鍵穴が日常生活に密着しているからこそその呼び名だろう。

話がそれた。

子守。

外国から新しく越してきた幼児連れの家族が必ずといっていいほど最初に尋ねるのが、「ね、ドイツ語を話す子守いない？」「スペイン語話すのは？」である。親が英語を話せても、自国を離れたことのない幼児は普通、母国語しか解さない。今まで国際クラブで何度も「子守募集中」の記事を出しているが、いたためしがいない。

わたしは電話を10本あまりかけた。10代から20代の子どもを持っている各国のひと、アメリカンスクールとインターナショナルスクールのスクールバスの世話をしているひと、その知り合い、それから人づてに聞いていたプロの、イタリア人元保育士。結局男の子も入れて（そう、男の子の子守もアリなのだ。男の子だって弟妹の面倒をみなれている子はあるし、幼児が男なら子守も男のほうがいい場合もある）、12歳から51歳まで、13人集まった。対応できることばが、英語、イタリア語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、アフリカーンス、トルコ語の7つ。もちろん、2つ3つしゃべれる子が多い。われながら、自分の人脈の広さと手際、それから国際的な仕上がりのおもしろさにほくそえんだ。

その名簿を印刷に回したら、印刷担当のイタリア人が、
「やっぱり日本人はやることが違うわ、と感心して眺めたのよ」とニヤリと笑
う。

「何よそれ」

「だってさ、名前、苗字、年齢、しゃべれる言語、電話番号、その他、の一覧
表でしょう。おまけに相場まで書いてある」

「それが？」

「イタリア人じゃここまでいたれりつくせり書かないわ」

「そう？」

「そうよ」

わたしは日本人らしくない、と言われ続けてきたが、どうも日本人だったら
しい。この手のそつのなさというか隅々まで詰めがきいたやりかたが。意外な
評価のされかただったが、わたしの最大の置き土産になったのは嬉しかった。

今年わたしが務める役員はお出かけ行事係である。すでに頭に計画はいくつ
かあった。わたしの最後の寿司教室。人気のあるイタリア料理教室。それから
去年計画していたのだが、雨で行けなかったスイスのモンテ・ジェネローゾと
いう山行きである。ここはミラノから近くて、1 時間ほどのハイキングが楽し
めるだけでなく、古代の熊の化石が出てきた洞窟があるのだ。ガイドつきで見
学できる。

こんな妙なものをどこで見つけ出したのかと聞かれるが、夫の同僚に三度の
飯より山が好きという男がいて、登山電車と、ハイキング、360 度の眺望の 3 つ
が全部楽しめる山を教えてくれた。家族で行ってみると、登山電車で頂上寸前
まで行ってもよし、最後の 1 駅の区間を歩いてよし。そこは 5 歳の子は多少
おぶったものの、7 歳の子の足でも 1 時間半ほどのゆるやかな道で、広々とし
た草原を見おろし、放牧の牛の鐘の音をゴロンゴロンと遠く近くに聞きながら、
山羊が道に出てくればおずおずと撫（な）でてやる、というまことに牧歌的な
コースだった。最後の頂上への登りは険しかったが、三度行ってみて、晴れた

日ならドイツのmatterホルンからフランスのモンブランまで見える。頂上駅の建物にはレストランがあって、絶景を眺めながらの食事が中でも外でもできる。そのパンフレットで、古代の熊の化石が出土した洞窟、とあるのを見つけたのである。

今まで国際クラブでハイキングを計画したことはなかったが、蓋を開けてみるとスペイン人とドイツ人が大挙して申しこみ、空前の30人という数になった。

遠くの空にパラグライダーが豆粒のように小さく、風に乗ってすうっと舞うのを見ながら、草原をドイツ人のモニカと歩いていると、ウチの旦那がね、と彼女が言う。

「40歳を前にやっとかなくっちゃ、ってスカイダイビングを始めたのよ。そしたらあっという間に病みつきになっちゃった。降りる様子を友だちがビデオに撮ってくれたんだけど、飛び降りる直前はまあ彼、真っ青な顔をひきつらして、唇がピクピク震えてんの。マジで恐いのよ。ところが、えいやって飛び降りてしばらくするとね、まああ、ニコオと笑ってね、楽しそうにパラシュートでゆっくり降りていくの」

「あんたはやんないの？」

「わたしはいいわ。冗談じゃない。初めはふたりで降りてくりゃいい、って旦那は言うんだけどね。ちょおうっとね」

「ふうん。わたしパラシュートは怖いけど、パラグライダーはやってみたいわ。落ちるんじゃないかってゆうらゆうら飛んでいけるんでしょ。すごく気持ちよさそうじゃない？空を飛ぶのって小さいときからの夢よ。空からの眺めも魅力だわ」

外人連中と楽しくおしゃべりをしていると、わたしは家族とすっかり離れてしまった。だいたい、企画者であるからには、全体の面倒をみるほうを優先しなければならないではないか。それに夫も子どもたちも、わたしの友人に愛想をふりまこう、という気はあまりない。

欧米の男どもだとたいはいは社交的で、女房の友だちも愛想よくもてなすし、

話題が合いさえすれば結構もりあがるのだが。そういう文化、習慣なのだな、と思う。わたしとしてはウチの夫ももう少し社交をしてくれたら、と思わないではないが、元々の性格もあり、強制できることではない。

家でも、化学療法のあいだ夕食を持ってきてくれた友だちが、子どもたちに、名前はなあに、学校はおもしろい？ などと話しかける。そのときの子どもたちの受け答えの愛想の悪いこと。「はい」「いいえ」程度でさっさと2階へ逃げる。叱ると、「だってみんな同じこと聞くんだもん。3べんも言ってりゃうんざりするよ」。

結局、モンテ・ジェネローゾでは昼こそ家族と一緒に食べたものの、それぞれのペースで頂上へ行き、降りていると、あつというまに夫や子どもがどこにいるかわからなくなった。まだ携帯電話が普及していないころである。わたしはガイドの時間を気にして熊の洞窟に先に行ってみたが、家族は誰もいない。洞窟は思ったより小さく、まだ発掘している最中のようなだった。わたしひとりで熊の化石を見て、子どもたちからずいぶん恨まれた。